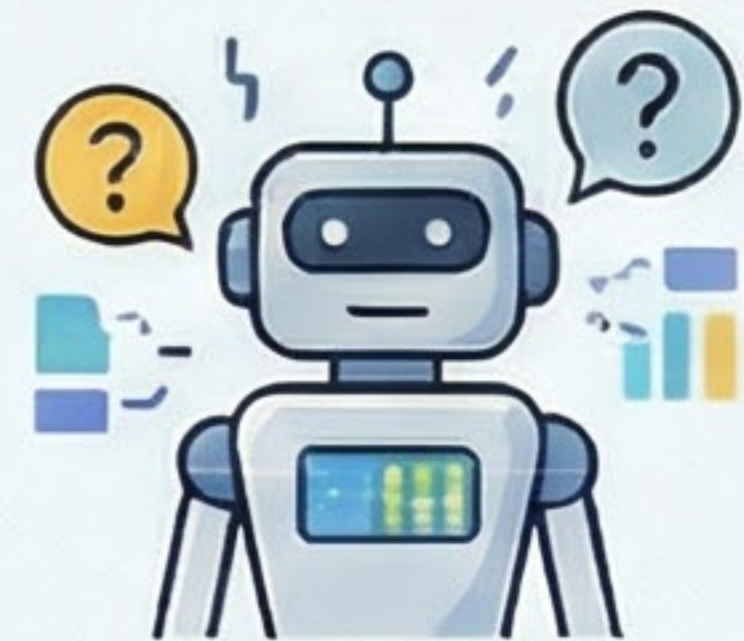


知財実務の革命：Patsnap Eurekaは如何に汎用AIを凌駕したか

課題：知財業務の壁と汎用AIの限界



知財業務はイノベーションのボトルネック
専門家のリソースは有限、1つの発明の調査に数日から数週間を費し、R&Dの速度を阻害している。



汎用AIへの期待と幻滅
ChatGPT等の汎用LLMは、専門用語を理解できず、存在しない特許番号を捏造するなど、追従正確性が求められる知財業務では致命的な欠陥があった。

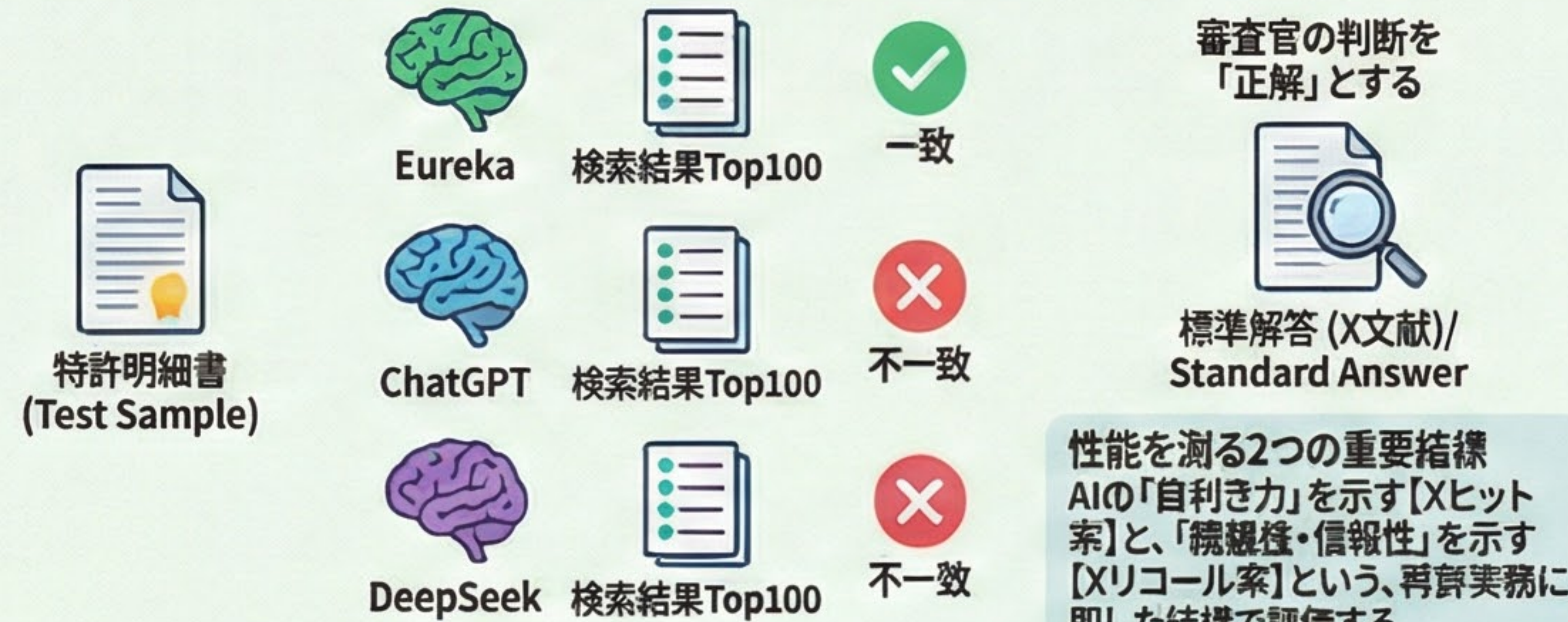


AIの性能を測る「ものさし」の不在
これまでAIツールの性能を実証的に比較する基準がなく、各ベンダーの「破壊」という言葉を信じるしかなかった。

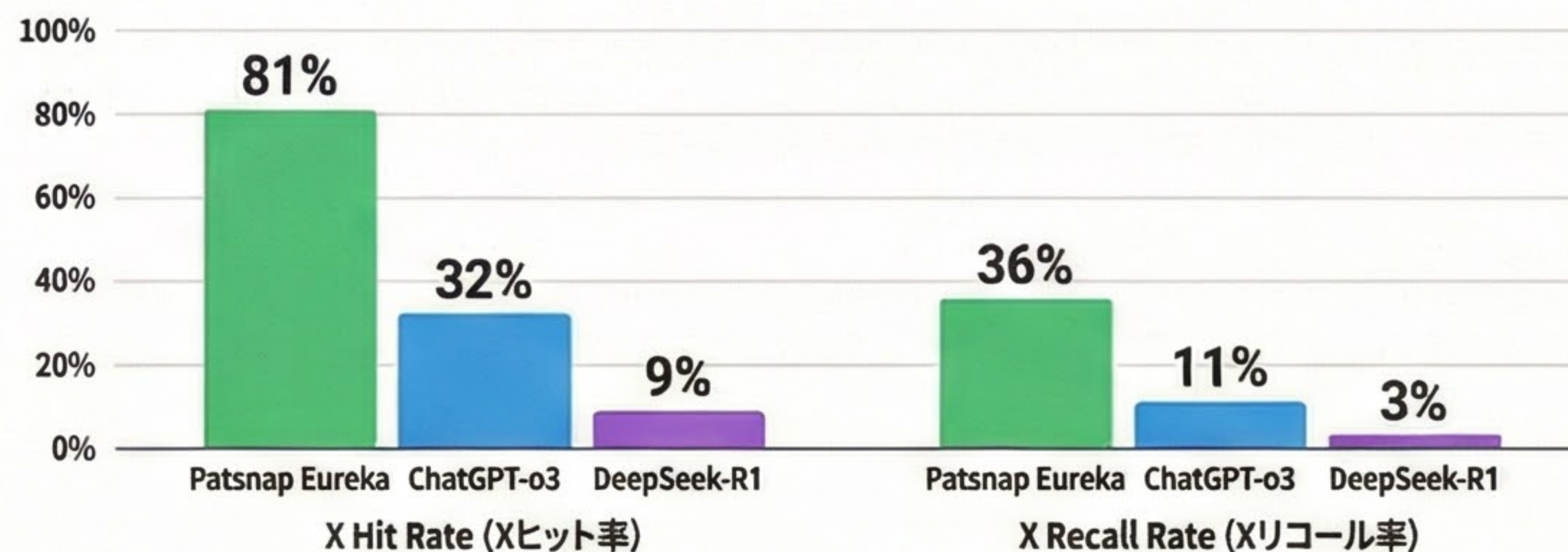
解決策：客観的評価基準「PatentBench」の仕組み

業界初のIP実務能力ベンチマーク「PatentBench」

AIの一般的な言語能力ではなく、「新規性調度」のような要領の業務をどれだけ進行できるかを調定するために設計された評価基準。



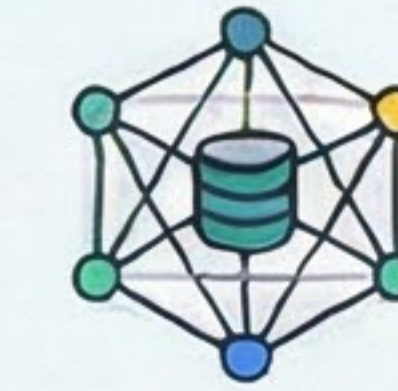
証明：専用AI vs 汎用AIの衝撃的な性能差



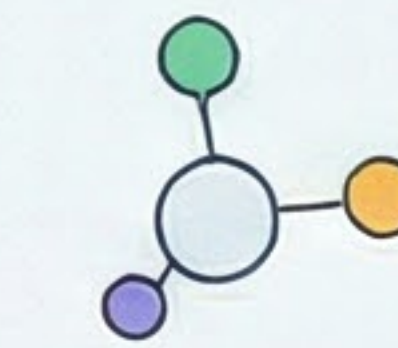
Xヒット率で圧倒的優位：Eurekaは81%を達成
Eurekaが約8割の案件で正解文節を発見したのに対し、ChatGPT-o3は32%、DeepSeek-R1はわずか9%に留まり、実用レベルの星が明確になった。

Xリコール率は36%：AIは「代替」ではなく「パートナー」
Eurekaでも視確率は36%であり、AI単独で完璧な認識は不可能。しかし、人間が確認すべき重要文節の1/3以上を提示し、「3日間の検索作業」を「3時間の分析作業」に変える。

なぜ？：Eurekaを支える独自技術



20億件以上の構造化された独自データ基盤
174カ国の特許や論文などを縦に章縛するだけでなく、名寄せや引用関係を組付けた「知蔵」としてAIが利用できる。



熟練者の思考を視覚化する「RAT」アーキテクチャ
一度の検索で終わらず、AIが自ら結果を評価し、検索戦略を修正して再検索を繰り返す「検索認識思考 (RAT)」により、正解に近づいていく。

ユーザー
入力

クエリ
生成

データベース
検索

自己修正/
クエリ修正

エージェント
評価

最終分析



調査から明細書作成まで支援するエージェント群
新現性能者だけでなく、侵害予前調査 (FTO)、明細書作成支援、特許スカウティングなど、知財実務の各フェーズに対応した機能を提供。

影響：AIと共創する知財の未来



人間の役割は「調査」から「戦略的判断」へシフト
AIが候補文節を高い調度で表示するため、専門家は「その立証で本当に選ばれるか」「どう回避するか」といった、より高度な戦略決定に集中できる。



セキュリティとガバナンスがAI選定の必須要件
未公開の発明情報を解読した汎用AIに入力するのは情報漏洩リスクが高い。金融向けAIは、データが学習に使われない保証 (ISO認証など) が重要となる。



AIは万能ではないが、最強のパートナー
未来の知財専門家には、AIを操縦し、その出力を批判的に検証し、最終的な判断を下す「AIオーケストレーション能力」が求められる。